説教20211010ヘブライ3-1マルコ10-17「わたしたちこそ神の家」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

「わたしたちこそ神の家」と言われて、分かったような分からないような思いを私たちは抱かされるのではないでしょうか。今日はそこのところがよりはっきりと分かるようにお話していきたいと願います。

　まず、家というのは何でしょうか。木や石やセメント等の材料を使ってたてられる物体が家だとも言えます。が、家はそれだけを言うのではありません。その中に住む人々、時には動物たちも、家を構成するのに無くてはならないものです。家は、住む人を失う時、中に吹き込む風を遮られ、呼吸するのを止めるかのようです。そして家は、住む人の冠婚葬祭といった儀式や日々の生活が営まれる場所でもあります。又、家は、そこに住む人の社会的地位や、類縁関係を誇らしく示すシンボルとしても建っていることでしょう。こう説明しただけで、家というものが一個の生命体のようであるとイメージされることでしょう。そうすると「わたしたちこそ神の家」という御言葉もより深く理解できるのではないでしょうか。

　今日の説教はこれで終わりではありません。神様は私たちを家として、私たちの内に住んでくださいました。このことが最も重要で、又最も喜びに満ちた出来事です。私たちの家は、どこにあるのでしょう、それはわたしたち各自の、それぞれの体の中の中にあるとも言えましょう。又、二人、三人の人たちが、主の御名によって集められているときには、その人たちの間に、私たちの家はあるのです。そしてその私たちの家に、神は常に、又どこにあっても住んでいて下さるのです。神の住まう私たちの家は、私にとって比類のない安全基地であり、もう私はどんなことがあっても絶望することなく、孤独になることがなく、そして死をも乗り越えられるすみかを、手中にしたのです。

　このように、「わたしたちこそ神の家」であることは、いいことづくめで、一点の陰りもない、完全な救いへの道であり、今ここに訪れている神の国といってもいいかもしれません。「わたしたちこそ神の家」であることを、私たちはぜひ、隣の人たちに知らせていきたいと思います。

　さて、こんなにいいことずくめの「わたしたちこそ神の家」でありますけれども、この家を持つには、条件があります。ヘブライ人への手紙3章6節に記されていますが、「もし確信と希望に満ちた誇りとを持ち続けるならば、わたしたちこそ神の家なのです。」もし確信と希望に満ちた誇りとを持ち続けるならば、という条件は、つまり信じ続けるならばということです。私たちは、まず、「わたしたちこそ神の家」と信じて、それからその家がどんな処なのかを調べて、知っていくことが大切です。

　では、神が住むわたしたちという家がどんな処なのかを調べて参りたいと思います。

今日のヘブライ人への手紙の箇所では、モーセとイエスキリストが比べられています。今の私たちにとっては、モーセとイエスキリストとは比較にならない存在ですが、古くからの神の民であるヘブライ人にとっては、モーセという人は、唯一、神と顔と顔を見合わせて語り合うことが出来た、特別な存在であり、イエスキリストがやってこられた時に、両者を比較してしまったのは、当然の成行きでありました。今の私たちには、この時のヘブライ人のようにモーセを、神のように崇拝してしまう心情がありませんので、ちょっと分かりにくいのですが、読んで参りましょう。「イエスは、御自身を立てた方に忠実であられました。家を建てる人が家そのものよりも尊ばれるように、イエスはモーセより大きな栄光を受けるにふさわしい者とされました。どんな家でもだれかが造るわけです。万物を造られたのは神なのです。」ここでイエスは家を建てる人、家を作る人とされています。イエスは父と一体であり、創造の主であるイエスが語られています。私たちという神の家を作られたのは主イエスであります。その家を作られた主イエスが、その家にずっと一緒に住みたいと思われるのは当然ではないでしょうか。あるものを作った者は、最後までそのあるものの行く末を間近で見守り見届けたいと思うことでしょう。

　一方、モーセが作った神の家とは、幕屋のことです。出エジプト記でモーセは主なる神から「わたしが示す作り方に正しく従って、幕屋とそのすべての祭具を作りなさい」と命じられて、幕屋を建てるのですが、それは組みばらして、又、別の処に建て直すことが出来るテントのような構造のものでした。さて、この幕屋は、主なる神が作ったものか、あるいはモーセたち人間が作ったものか、これは頭を悩ます問題です。モーセたちにしてみれば、幕屋は、全て神の命令によって建てられ、神が御建てになったものと信じていたことでしょう。事実、荒れ野での40年の生活において、幕屋は、人々にとって、神が臨在される、聖なるよりどころであったのでした。幕屋の中にある最も聖なる場所、そこに神様が臨在されると信じられた場所である至聖所は、大祭司が年に一回だけ足を踏み入れることが出来る、最高に恐れ多い場所と信じられたのです。

　ところが、その様な恐れ多い幕屋やそれに続く神殿は、今はもうこの地上にはありません。幕屋や神殿は、時が経てば、朽ちていき、あるいは人間の手によって破壊されることもあるのです。果たして神が作られた神の家がなくなってしまう等ということがあるのか、

このような疑念は、誰しも抱くことでしょう。

私たち人間は、永遠に存続する神や、その神が作られた神の家に住むことにあこがれているのではないでしょうか。なぜなら、この死すべき体が、永遠に生かされることを願うからです。だから、幕屋や神殿といった神の家がなくなってしまうことは、大変、人間にとって恐ろしいことなのです。

この地に最初に神殿を建設したソロモンはこう祈りました。

「神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。

わが神、主よ、ただ僕の祈りと願いを顧みて、今日僕が御前にささげる叫びと祈りを聞き届けてください。そして、夜も昼もこの神殿に、この所に御目を注いでください。ここはあなたが、『わたしの名をとどめる』と仰せになった所です。この所に向かって僕がささげる祈りを聞き届けてください。」

ソロモンは、最初から、自分たちが建てる神殿が、神にふさわしくないものと言い切っています。これは一面、神の見前にへりくだっているとも言えますが、実際のところは、ソロモンは、神の御心から離れ、自分の願望や欲望を満たすための、贅沢で華美な神殿を作ってしまいました。そしてその贅沢で華美な神殿は数百年の後に、人間の手で破壊されました。

ソロモン王は、自分が建てた神殿に執着し、そこに神をとどめおこうとしましたがそれには無理がありました。ソロモンは、神とともにいることが出来ず、その人生は愛欲に溺れ、その国は多くの争いの種を宿して、彼の死後、国は分裂してしまったのでした。

以上見てきましたように、神の家としての幕屋そして神殿は、いつしか、人間の業が取り仕切る、神がいない偶像崇拝の場となってしまったのです。しかし、まことに神が作ったとしか言いようのない、私たちこそ、神の家である、と信じることはそれに比べて、実に信じやすく優しいことであります。私たちは、欠けが多い器であり、不完全なものですが、それでも主なる神の作られたものであり、そこに神が住んでくださると、信じることは、人間が作った壮麗な神殿の入り口でひれ伏すよりも、真実にかなっています。

　さて、これまで、神の家としての私たち、についていいことずくめの話をしてきましたが、ここからは、それについての厳しくつらい側面を、マルコ福音書により説明したいと思います。神が私たちの内に住んでおられる、ということは、私たちが一時も神から離れられないということです。それは、時には、夫から離れていたいとおもうご婦人の心境の比ではありません。神は完全無比な方ですから、私たちが神の目を盗んで、自分の思いを遂げようとすることも、神様には全てお見通しであります。

　今日のマルコ福音書の箇所にある金持が出て参ります。彼は今評判のイエスに走り寄ってひざまずき「良い先生」と話しかけます。彼はイエスをおだてようとしたのです。

この一言でイエスは彼の全てを見通しました。彼は今まで、見返りや報酬や利得によって生活を建て、彼の心はそういう方法によって守られてきたのでした。彼がイエスに対して「よい先生」と話しかけたのも、イエスから最大限の見返りを得ることを期待してのことだったでしょう。それは次の受け答えに現れています。イエスは「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」と問いますがそれに彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と応えるのです。実は、これは素直な応えになっていません。このイエスの質問に素直に応えるのなら、はい、私は知っています、というか、又は、いいえ、私は知りませんでした、と答えるかのいずれかなのです。それなのに彼は、「守ってきました」と問われないことを応えてしまうのです。ここには彼の、ほめてほしい心、評価されたい心が潜んでいます。イエス様というのは厳しいお方で、こういった小さな一言一言で、全てをお見通しになる方です。次のイエス様の言葉は、その様な彼の心情を踏まえてのものです。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」このイエス様の言葉は、その時の彼にとって実行不可能なことでした。なぜならば、そのときの彼は、ほめてほしい心、評価されたい心に支配されて、自分から人に与え、喜ばすという心が芽生える余地はなかったからです。

　イエス様は、神の国に入ることが、決して善い行いの、見返りや報酬として利得されるのではないことをはっきり述べられています。では神の国は何によって与えられるのか。それは、神の慈しみによってです。この金持に対し、イエスは「いつくしんで言われた」と21節に書いてあります。もしこの金持ちが、見返りや報酬だけではなく、神の慈しみによって無償で与えられるということを知っていたならば、イエスの、「貧しい人々にほどこしなさい」という言葉も、簡単に実行できたはずなのです。なぜなら、彼にはそれにふさわしい財産があったからです。ところが彼にはそれを、「する気がなかった」のです、施しの心というのはその時の彼には想像することもできないことだったのでしょう。

　「する気がない」ということは、私たちの心に巣くう小さな取るに足りない心情として私たちは軽視するかも知れません。しかし、その小さなことをイエス様は「神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」という御言葉で、端倪すべからざる重大なこととして戒められておられます。「わたしたちこそ神の家」とされて共に住まれるイエス様は、私たちの小さな一挙手一投足までも見ておられます。それがイエス様の厳しくもあり、又ご自身の命を投げうってまでも私たちを永遠に守られる、私たちに対する御姿なのです。その厳しくもあり又慈しみ深い主と共にこの一週間も歩んでまいりましょう。

祈ります

慈しみ深い父

あなたは、私達一人一人の内に住まわれ、私達を豊かに祝福し、完全に守っていてくださいます。又、私たちが二人3人と集う時、あなたは確かに私たちの中心に立たれて、私達を励まし、よい方向へと導いて下さいます。私たちは、あなたを信じて、あなたの前にへりくだり、感謝と賛美を捧げます。

今、全世界は行き来することも便利になり、一つの場所になろうとしています。しかし、様々な悪しき支配や、不道徳が世界を覆いつくそうとしています。どうか、全世界を正しく支配されるあなたが、一人一人の内に宿り、この世に平和と喜びをお与えください。

神の国は、お金でかえるものではなく、あなたの慈しみによって与えられるものであることを私たちに悟らせて下さい。

今日は神学校日礼拝として、殊に、献身者を産み育てる神学校を覚えて礼拝しています。私たちは人生において、いつあなたのお召しによって、神学校に学ぶことになるかも知れません。又、それぞれが与えられた召しによって、教会にあって、この世にあって、あなたへ奉仕しています。そのような私たちがあなたを信じ、確信と希望に満ちた誇りとを持ち続けることが出来ますよう、守り導いて下さい。

父と聖霊と共に